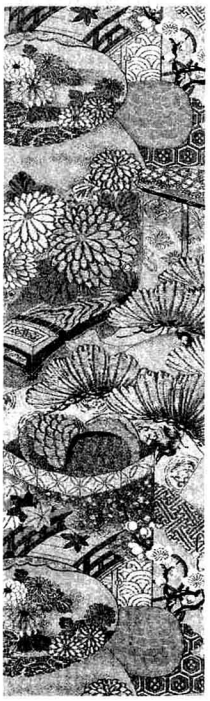
日本文学史

高鹏飞　（日）平山崇 著

苏州大学出版社



日本文学史

高鹏飞　（日）平山崇 ◐ 著

苏州大学出版社

阜阳师范学院图书馆
藏书

图书在版编目(CIP)数据

日本文学史：日文/高鹏飞，(日)平山崇著. —
苏州：苏州大学出版社，2011.7
ISBN 978-7-81137-687-6

Ⅰ.①日… Ⅱ.①高…②平… Ⅲ.①日语—阅读教学—高等学校—教材②文学史—日本 Ⅳ.①H369.4②Ⅰ

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 151535 号

书　　名：日本文学史

著　　者：高鹏飞　(日)平山崇

责任编辑：杨　婷

装帧设计：刘　俊

出版发行：苏州大学出版社(Soochow University Press)

社　　址：苏州市十梓街 1 号　邮编：215006

印　　刷：宜兴市盛世文化印刷有限公司

网　　址：www.sudapress.com

E-mail　：yanghua@suda.edu.cn

邮购热线：0512-67480030

销售热线：0512-65225020

开　　本：787 mm×1 092 mm　1/16　印张：27　字数：600 千

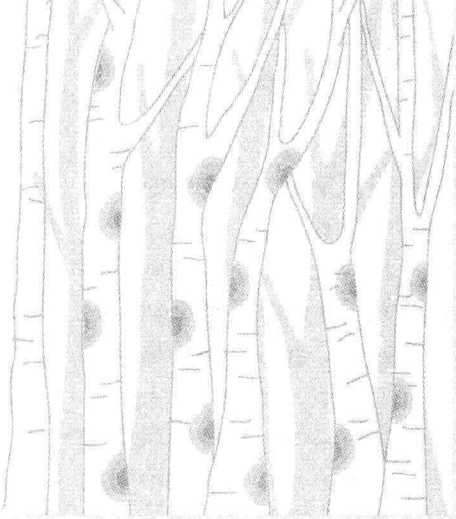
版　　次：2011 年 5 月第 1 版

印　　次：2011 年 5 月第 1 次印刷

书　　号：ISBN 978-7-81137-687-6

定　　价：48.00 元

凡购本社图书发现印装错误，请与本社联系调换。服务热线：0512-65225020



序　言

■ 本書の意義

日本において現存する最古の文献は『古事記』とされる。この書物は周知のように、全文が中国の文字で記されており、日本文学と中国語が上代から密接な繋がりをもっていたことを示している。古代日本では中国語の変化に伴い、平安時代初期に典籍を漢音で読むことがさかんになると、日本語の内に拗音や音便が生じた。また漢字から片仮名や平仮名が作られていった。古代の詩はもちろん、『万葉集』に集められた和歌も、また『源氏物語』などの物語も、中世の鴨長明『方丈記』などの随筆、近世の曲亭馬琴の読本も、みな中国から渡来した文化の影響を受けながら成立したものである。近現代には欧米からの影響を強く受けるが、夏目漱石や芥川龍之介、川端康成らの小説にも中国文化の影は深く射している。日本語と日本文学の歴史は、実に長いあいだ、中国語と中国文学の影響を受けながら独自に展開してきたのである。

それゆえ、日本文学の個々の作品や、上代から近現代までの歴史を考察するには、中国人と日本人の共同研究が不可欠であり、またそれが重要な役割を果たす。それによってこそ、公正で、厳密で、視野の広い考察が可能になる。現在、日本および中国で夥しい数の「日本文学史」の書物が出版されているが、ほとんどは日本人か中国人のどちらか片方の著作であり、共著は稀である。その意味で、中国人の高鵬飞氏と日本人の平山崇氏による本書『日本文学史』は、大きな意義があり、今後の研究のありかたを示唆するものといえる。

文学史に名前を残すどんなに独創的に思える作品も個性的な作家も、空中に独立して存在していたわけではない。そこには常に先行作品やその時代背景が働いている。それゆえ、文学研究には広範囲な視野が要求される。たとえば中世、鎌倉幕府の第三代将軍、源実朝の歌集に『金槐和歌集』がある。この事実だけを記す本は文学史の名に値しない。当時は執権政治が敷かれ、北条氏が実権を握り、源実朝は将軍という身分にありながら権力の外に置

かれていた。そのため実朝は、和歌に打ち込み、当時、歌人の第一人者と目された藤原定家に教えを請うた。これには後鳥羽上皇が院政を敷き、台頭する幕府勢力をおさえるため、実朝を異例の早さで右大臣に昇進させ、自分の側にとりこもうとしたことが関係する。それゆえにこそ、実朝は自分の歌集を『金槐和歌集』と名づけたのである。その「金」は鎌倉幕府の「鎌」の偏、「槐」は大臣の異称「槐門」からとられている。自分は鎌倉幕府の将軍であり、かつ上皇から右大臣に任命された者である、ということが、その書名に含意されているのである。日本文学を学ぶには、作者の環境や執筆動機、書名の由来など全体的な理解を目指したい。それには政治制度や権力関係、文化状況を知ることも必要になる。それらを総合的にとらえてこそ、作品の理解も格段に深まる。本書は、そのような学習を可能にする教科書として、よく工夫されている。

また、現代文学に関しても、たとえば「文学と心理」の関係が考察されている。19 世紀後半、ヨーロッパでは心理的障害や異常心理に関心が集まり、心理学、精神医学が誕生した。ヨーロッパの文芸にも、日本文学にもそれらを盛んに取り入れる動きが起こった。本書では、実例をあげて、それを考察している。さらに今日の電子書籍やハイパーテキスト、ケータイ小説など、科学技術の発達に応じて出現した新しい媒体や現象をも紹介し、名実ともに古代から当代に至る日本文学史になっている。

本書は、全文日本語で書かれ、中国語訳が付されていない。そのため、敷居が高いと感じる読者もいるだろう。だが、日本文学の詳細な解説は、日本語で学ぶのが一番である。中国語に翻訳すると概念にズレが生じ、誤解も生じやすい。学校で教科書として本書を用いる場合には、教師の解説が理解を助けてくれるだろう。本書を独習する場合には、最初から、すべてを理解しようと意気込むことなく、本文の太字や図表を見て、重要事項をまず頭に入れ、おいおい理解を深めてゆくことを心がけてほしい。日本語学習の進行とともに、本文の詳細な意味も次第にわかってゆくはずである。なお、総計 60 万字ほどの大著であり、自分なりに計画を立てて、読み進めてゆく心構えが必要だろう。

■ 構成

本書は古典編と近現代編から構成されている。古典編には上代から近世までの重要作品３０、近現代編には明治時代から現代までの作者３０人をとりあげ、総計６０項目からなる。時代区分は「上代」「中古」「中世」「近世」「明治」「大正、昭和（戦前）」「戦後」の７つに分けられている。各時代の最初に「概観」が置かれ、それによって概略を掴むことができる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

各時代の最後にまとめてある「重要事項一覧」は学んだことの整理に役立つ。

各章の見出しも機能的に工夫されている。第１章の「古事記」には、＜■成立：712 年　■史書　■全３巻　■撰録：太安万侶＞と記され、基本的情報が一目瞭然である。その下にキーワードが配列され、読解の指針を示している。

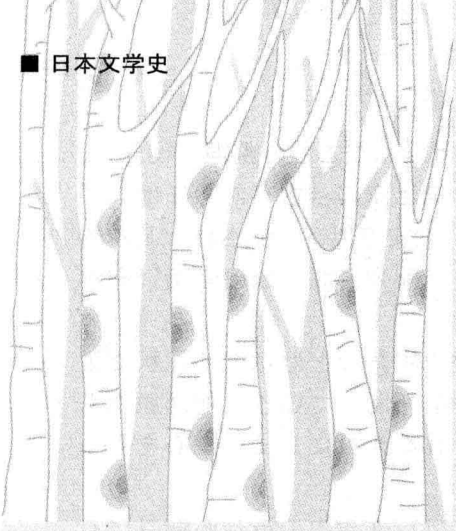
本文は分かりやすく書かれ、専門用語や歴史用語などは章末の注釈で説明される。また適宜、図や表が用いられ、理解を助けている。作品原文も引用され、具体的に接することができる。これを入口にして、関心をもった作品には、進んで全文にふれてほしい。

個々の作品や作者の紹介を重んじる形式には、文学史の流れが掴みにくくなる。その欠点を補うべく、本書では各種コラムを設け、「日記文学」「物語文学」「小説の変遷」、「詩壇の変遷」など、ジャンルごとに項目を立て、その成立、発展、衰退を素描してある。「自然主義」や「新感覚派」など数が多く、その実態も複雑な文芸諸流派についても、理路整然と明快に提示している。

また各章の最後には５つの研究課題が設けられている。この問題を解くことで、本文の理解を更に深めることができるし、そこから新たな研究に進むこともできる。日本文学の研究も日進月歩である。個々の作品についても、そして、それらが織りなす文学史も、研究は絶えず深められ、更新されている。やがて本書の学習者のなかから、新しい研究が生まれてくるにちがいない。

本書は、見出し、本文、コラム、注釈、課題研究と全てにわたって学習者の立場を十分考慮して執筆され、編集されている。日本文学の学習者のすべてに最適な良書として、本書を強く推薦したい。

鈴木貞美
国際日本文化研究センター教授
2011 年 5 月 30 日



序　言

当『日本文学史』は日本の文学を古代から現代までを独自の観点から考察する研究書である。全書日本語で書かれ、使用される文型や単語も難解なものがあって、決して簡単に読了できる本ではない。しかし作者の学習者への配慮として、漢字にはルビが振られ、細かい注釈もつけてある。また、ほぼ全ページに図表があり、読みやすくなっている。

本書の特徴は、まず、中国人と日本人による共同執筆ということである。中国人の高鵬飞氏は３０余年という長期にわたって日本語教育および日本文学の教育と研究に従事され、日本での留学経験や教授経験もある。その蓄積された経験と学識を元にして日本文学史を執筆された。一方の日本人の平山崇氏は、日本語教育能力検定など正規の資格を持つ日本語教師であり、その教授経験は約８年に及ぶが、日本文学の専門家ではない。この点について疑問や不満を持つ読者もいるかもしれない。しかし、そもそも日本語と日本文学は密接な関係を持っているのであり、両者を区別して考えることはできない。日本語がどのように移り変わって現在に至ったのか、言文一致はどのように達成されたのか、これらは日本語教師が身に付けておくべき知識として認識されている。よって、日本語教師の平山氏が日本文学の本を書いたとしても、不思議なことはないのである。むしろ、専門家とは違った角度から文学史を考察し、新しい知見を読者に提供することができ、好ましい事と私は思っている。

我が国ははるか昔から偉大なる中華文明によって同時代の国々に影響してきた。その最たる国が日本である。日本はおよそ6世紀から19世紀末まで、中国の各種文物を摂取しつつ成長してきた。その伝統は明治維新から断絶され、あろうことか中国を軽視し、侵略戦争さえ仕掛け、暴虐の限りを尽した。1945年に敗戦を迎えて、周恩来首相によって中日平和友好条約を結ばれたが、我々中国人の日本への憎悪感は消えないのが正直なところである。一千年以上の、多方面にわたって日本への貢献が、仇で返されたのだから、当然の憎しみであろう。

しかし、中国の一般市民ならともかく、我々のような日本語・日本文学

の研究者は、ここで冷静さを保たなければならない。中国を侵略したのは兵士であり、軍部である。では、当時の日本市民はどのような気持ちであったのか。暴走する日本政府に踊らされるように日々を送っていたのではなかったか。我々中国人は、彼らを単純に「中国を侵略した加害者」と言うことができるだろうか。同じ日本人というだけで、兵士たちと同一視していいだろうか。

本書には多くのコラムがあるが、近現代編ではアメリカと日本の関係について論じたものも多い。具体的には、原爆被害、GHQの過剰な検閲、在日米軍の犯罪、水爆実験の被害などである。中国人にとって日本は加害国であるが、その日本もまた原爆の被害に遭っているのである。こうした総合的、客観的な視点は、日本を正しく理解する上で必須のものである。そして、文学が社会という土壌から生み出された以上は、日本文学への理解も日本社会への理解を前提とすべきのである。本書は以上のように、文学のみならず、時代背景や社会情勢も考慮したうえに執筆されていて、ユニークで画期的な著作と言える。やはり中国人の高氏と日本人の平山氏の共同執筆だからこそ実現できたと思う。

この『日本文学史』は、中国の大学生、大学院生だけでなく、中国滞在の日本人の方々にも強く推薦したい。

谭晶华
教育部高校日语专导委员会主任
中国日本文学研究会　会长　教授　博士生导师
20011年5月31日

目　次

序言

古典編

■ 上代文学概観 / 3

第 1 章　古事記 / 5
第 2 章　日本書紀 / 11
第 3 章　風土記 / 14
第 4 章　懐風藻 / 17
第 5 章　万葉集 / 20
上代文学◆重要事項一覧 / 25

■ 中古文学概観 / 26

第 6 章　凌雲集 / 28
第 7 章　日本霊異記 / 32
第 8 章　竹取物語 / 35
第 9 章　伊勢物語 / 39
第 10 章　古今和歌集 / 42
第 11 章　土佐日記 / 49
第 12 章　枕草子 / 55
第 13 章　源氏物語 / 59
第 14 章　栄花物語 / 66
第 15 章　今昔物語集 / 69
中古文学◆重要事項一覧 / 74

■ 中世文学概観 / 75

第 16 章　新古今和歌集 / 77
第 17 章　方丈記 / 88
第 18 章　金槐和歌集 / 94
第 19 章　平家物語 / 98
第 20 章　徒然草 / 106
第 21 章　増鏡 / 111

第 22 章　菟玖波集 / 118
中世文学◆重要事項一覧 / 125

■ 近世文学概観 / 126
第 23 章　好色一代男 / 128
第 24 章　奥の細道 / 134
第 25 章　曽根崎心中 / 143
第 26 章　雨月物語 / 148
第 27 章　玉勝間 / 156
第 28 章　東海道中膝栗毛 / 161
第 29 章　南総里見八犬伝 / 166
第 30 章　東海道四谷怪談 / 171
近世文学◆重要事項一覧 / 176

近現代編

■ 明治文学概観 / 179
第 31 章　二葉亭四迷 / 182
第 32 章　尾崎紅葉 / 190
第 33 章　樋口一葉 / 196
第 34 章　森鴎外 / 201
第 35 章　島崎藤村 / 207
第 36 章　夏目漱石 / 214
第 37 章　正岡子規 / 224
第 38 章　与謝野晶子 / 232
第 39 章　石川啄木 / 240
明治文学◆重要事項一覧 / 245

■ 大正、昭和 (戦前) 文学概観 / 246
第 40 章　宮沢賢治 / 248
第 41 章　谷崎潤一郎 / 256
第 42 章　志賀直哉 / 263
第 43 章　芥川龍之介 / 271
第 44 章　川端康成 / 279
第 45 章　小林多喜二 / 286

第 46 章　岸田国士 / 292
第 47 章　堀辰雄 / 299
第 48 章　太宰治 / 308
第 49 章　中島敦 / 317
第 50 章　小林秀雄 / 325
第 51 章　江戸川乱歩 / 332
大正、昭和（戦前）文学◆重要事項一覧 / 339

■ 戦後、現代文学概観 / 341
第 52 章　井上靖 / 344
第 53 章　三島由紀夫 / 350
第 54 章　安部公房 / 357
第 55 章　遠藤周作 / 362
第 56 章　大江健三郎 / 368
第 57 章　司馬遼太郎 / 372
第 58 章　瀬戸内寂聴 / 377
第 59 章　村上龍 / 384
第 60 章　村上春樹 / 389
戦後文学◆重要事項一覧 / 401

参考文献 / 402
附録 1　文学史年表 / 406
附録 2　主要な文学賞（創立年、主催者）/ 412
附録 3　索引 / 413

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

古典編

上代文学概観

時代区分：文学の誕生から794年の平安京遷都の頃まで

■ 社会・文学の発展　縄文時代は狩猟と漁労という採集生活であったが、弥生時代に入ると水稲栽培を主体とする農耕が社会を形成し、人々の定住化、集団生活を促進した。血縁関係の氏族集団が発生し小国へと発展していった。中国の史書『魏志』の倭人伝によると、2世紀末、日本では邪馬台国が数多くの小国を統合し、4世紀前半には、大和地方を中心に有力な豪族が出現し、他の国を服属させて巨大な政治勢力を形成した。ここに大和朝廷が誕生し、中国の先進文化を学びながら、天皇を中心とする中央集権国家が目指された。聖徳太子の一連の政策、大化の改新（645年）による律令制を通して、日本は支配体制を構築していった。紀元710年（和銅3）の平城京遷都から紀元794年（延暦13）の平安京遷都までが奈良時代である。

■ 上代文学 ■

紀元　口承文学（神話・歌謡）
5、6世紀　漢字の伝来
607年　遣隋使派遣
630年　遣唐使派遣
7世紀後半　白鳳文化発達
712年　『古事記』
713年　『風土記』編纂の勅命
720年　『日本書紀』
733年　『出雲国風土記』
751年　『懐風藻』
8世紀後半　『万葉集』
794年　平安京遷都

文学的観点から振り返ると、古代の人間は自然を畏怖し、神々として祭っていた。その祭りの場で呪術的な韻文の詞章が唱えられ文学の原型となった。詞章は言語表現的に洗練されていき、神話・歌謡へと発展した。日本は当初文字を持たなかったので文学表現は口誦に限定されていたが、4世紀頃には大陸から漢字が伝来すると、漢字で神話・歌謡を記載する試みがなされた。神事の際に発する言葉は呪詞、神のお告げや神への祈願は祝詞、

更に和文で書かれた詔勅は宣命である。日本語の音韻に漢字を当てはめて読む万葉仮名が考案され、神話は散文となり、歌謡は定型化され、はっきりとした形を持つに至った。万葉仮名から片仮名と平仮名が生まれ、日本人は独自の文字による文学表現を実現するのであった。宣命書きや万葉仮名の発明によって、口承文学の記録化が盛んになり、記載文学へと大きく変化、発展したのは上代文学の特徴と言える。

■ 文学作品　中国大陸の文化の影響で日本は飛鳥文化、白鳳文化、天平文化を開花させた。先進国中国への意識は日本の国家意識をも目覚めさせ、史書の『古事記』、『日本書紀』及び地誌の『風土記』を成立させる原動力になった。歌謡から派生した和歌は五七五七七の短歌を中心に多くの人々に詠まれ、『万葉集』に集められた。中国文化を受容する中で漢詩文の創作もなされ、『懐風藻』が編纂された。

第１章　古事記

■成立：712年　■史書　■全３巻　■撰録：太安万侶

キーワード：神話伝説、飛鳥文化、大化の改新、最古の典籍、変体漢文

＜編者＞

太安万侶　生年未詳～723年（元正天皇養老7）。奈良時代の名高い学者。文武・元明・元正天皇に仕え、役職は従四位下民部卿である。天武天皇は686年に世を去り、『古事記』の選録には至らなかったので、元明天皇がその意志を引き継ぎ、太安万侶に命じてこれを完成させた。後に『日本書紀』の編集にも加わっている。1979年（昭和45）奈良市此瀬（田原）町の茶畑より銅板墓誌とともにその遺骨が発見された。

■古事記の序文■

於是天皇詔之　朕聞諸家之所　帝紀及本辭　既違正實　多加虚僞　當今之時　不改其失　未經幾年　其旨欲滅　斯乃邦家經緯　王化之鴻基焉　故惟撰録帝紀　討覈舊辭　削僞定實　欲流後葉　時有舍人　姓稗田名阿禮　年是廿八　爲人聰明　度目誦口　拂耳勒心　即勅語阿禮　令誦習帝皇日繼　及先代舊辭

＜成立＞

712年（和銅5）成立。太安万侶は711年（和銅4）元明天皇の命を受け、舎人の稗田阿礼[1]の誦習[2]した帝紀、本辞[3]を筆録して、翌年に『古事記』の編纂を終えた。

紀元672年、天智天皇の死後、**壬申の乱**[4]に勝利した大海人皇子が天武天皇となり、天皇律令制を完成したのである。序文により、当時、皇室の系譜を記した帝紀と、皇室や民間に伝わる神話を記した本辞があったが、誤りが散見されたので、天武天皇は、これらの書物を比較・検討し、間違いを正し、氏姓の尊卑による社会秩序を回復する目的で定本[5]を作り、稗田阿礼に、それを誦み習わせた。「定

■『古事記』■

＜原文＞夜麻登波　久爾能麻本呂婆　多多那豆久　阿袁加岐　夜麻碁母禮流　夜麻登志宇流波斯

＜訓読＞やまとは　くにのまほろば　たたなづく　あをかき　やまごもれる　やまとしうるはし

＜解釈：大和は国のまほろば　たたなずく青垣　山隠もれる　大和しうるはし＞

本を作った」というのは一説[6]で、実証されてはいない。

●性格・価値　『古事記』には天地開闢や英雄物語、悲恋物語などの神話、伝説、歌謡などが古代人の豊かな創造力によって伝承されているが、大和政権により政治的な改変を受けているものもある。歌謡や歌物語風の説話、伝承、神話などを多く含み、文学性にも富んでいる。現存する**日本最古の典籍**として価値が高い。

●表記　当時の日本はまだ平仮名が発明されていない時代で、使用文字はすべて漢字であった。序文は正式な漢文体であるが、それ以外は漢字の音と訓を交ぜ合わせた変体漢文を使っている。変体漢文とは日本語的にアレンジした変則的な文法の漢文を示す。太安万侶は、漢字の音読みと訓読みも駆使して筆録したのである。

右は望郷の念をこめて詠んだ歌である。古典中国語の文法は無視して、一つの漢字に一つの音を当てた**万葉仮名**(まんようがな)が使われている。仮名発明以前の日本語の音を表す工夫であった。

＜内容＞

●概要

古事記の構成、内容、言語は表の通りである。「漢文」とは古代中国の文語体の文章を示す。神々の歴史から天皇の神話・説話に到る三巻からなり、112首（一説、113首）の歌謡が盛り込まれている。各巻ごとに概要を紹介する。

構成	内　容	言　語
上巻	序文（『古事記』の成立過程など）	純粋な漢文
	天地開闢、神々の活躍などの神話	変体漢文。ただし歌謡はいずれも万葉仮名
中巻	神武（初代）～応神（第15代）	
下巻	仁徳（第16代）～推古（第33代）	

●上巻

数々の神が生まれ、天地開闢から神武天皇に至る神代(かみよ)の物語である。天照大御神(あまてらすおおみかみ)の天(あめ)の岩戸(いわど)物語や火照命(ほでりのみこと)、火遠理命(ほおりのみこと)の物語が有名である。神は実在しないが、天皇を神と結びつけることで権力の正統性を強調することを意図した。

■ 最初の歌 ■

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を

＜説明：この結婚の歌が日本文学最初の和歌ということになる。＞

『古事記』は散文ばかりでなく歌謡も含められている。最初に登場する歌謡は男と女が結婚して新居を作った際の情景を詠んだものである。

●中巻

初代の神武天皇から第15代応神天皇までの神話・説話が中巻の内容である。天皇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com